

南半球強豪 3 カ国のブレイクダウンにおける防御プレーの分析 ～ニュージーランドの特徴に着目して～

嶋崎達也¹⁾, 千葉 剛²⁾, 古川拓生¹⁾, 中川 昭¹⁾

Analysis of breakdown defense play of the three major Southern Hemisphere rugby countries ～ Focused on features of New Zealand ～

Tatsuya SHIMASAKI¹⁾, Go CHIBA²⁾,
Takuo FURUKAWA¹⁾, Akira NAKAGAWA¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify defense play in breakdown in world top-level rugby and features of New Zealand by comparing the three countries. In order to fulfill this purpose we analyzed 12 matches of The Rugby Championship in 2016 and 2017. In these games, New Zealand, Australia and South Africa played against each other. Subjects of this study were 1772 of rucks with continued to possess the ball. We analyzed the number of defensive players involved in breakdown and “ball out ruck”, the time required to get the ball-out from rucks, and the actions of the tacklers and arriving players. Also we used Fisher’s exact test to verify significant difference in the ratios. The significance level was set at 5% (two -sided test). The main results are as follows:

- 1) At the world top-level rugby, the following results were obtained. The number of player of “ball out ruck” was decreasing, 15% was nobody, 53% was one. 38% was one tackler and 53% were two. 63% was nobody of arriving players.
- 2) In New Zealand, the ratio of the small number of “ball out ruck” was high. Also, the “reload” rate was high, especially “reload” rate at “non-contest” was high. And “reload” rate was high with “ball-out time” less than 2.5 seconds.

Key words: Game Performance analysis, Breakdown, Ruck.

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

2) 防衛大学校

National Defense Academy

1. 序論

ラグビー憲章において、ラグビーゲームの原則として、ボールの争奪と継続が明記されている (World Rugby, 2018, p7)。このボールの争奪と継続の2つの原則は、ラグビーの独自性を保証する指標として捉えられており、「一方のチームがボールの保持の継続を維持しようとし、相手側のチームはボールを争奪しようとする。このことがプレーの継続とボールの保持の継続の必要不可欠なバランスをもたらす、この争奪性と継続のバランスは、セットプレーと一般のプレーの両方にあてはまる」(World Rugby, 2018, p9) とされている。しかし、1995年のオープン化^(注1)以降、オープン化とルール改正によって、とりわけプレーの継続化が促進された。その結果、インプレー時間とラック数が増加したため、ブレイクダウンと言われるコンタクト場面は大幅に増加した。ラック／モール数は、2015年のラグビーワールドカップでは平均178回にも達し、1995年のラグビーワールドカップで平均94回、1999年のラグビーワールドカップで平均122回だったことと比べると大きなゲーム様相の変化が見られる (World Rugby, 2015, p18)。ラック数は増加したが、攻撃側のボール継続率は2015年のワールドカップで平均94%と、高い値を維持している (World Rugby, 2015, p13)。これはボールの争奪は機会としては保たれているものの、結果としては攻撃側が高い値でボールを継続している現状をあらわしている。

継続性が増し、ボールを奪うことが困難となっているため、ブレイクダウンと呼ばれるコンタクト場面の戦術の重要性は増している。近年のルール改正では、タックラーに関する定義が整理され、防御側のボール争奪できる方向が制限されるなど、条件がさらに厳しくなったため (Lee, 2016)、「リロード」と呼ばれるタックルしたプレーヤーが早く起き上がるプレーが発展した (伊藤, 2012; 林, 2015)。その結

果2000年のゲームでは防御側のラックの参加人数は、世界トップレベルで1.8人という報告があり (松村, 2001)、2014年のゲームでは防御側の参加人数が2人未満のラックが57%であるという報告がある (Shimasaki et al, 2017)。さらにラックからのボールアウト時間が速いほど防御側の人数を多くラックに巻き込んでいることが明らかにされている (Shimasaki et al, 2017)。またタックルに関しては、古川ら (2006) や木内ら (2015) によつてのタックル様相について報告している。しかし、近年のラグビーゲームでタックル発生からラックからのボールアウトまでの防御側プレーヤーに関する行動を詳細に明らかにした報告は見当たらない。

このようにラグビーゲームが進化を遂げてきた中で、スーパーラグビーというプロリーグを中心にしていち早くプロ化を進めた南半球諸国がより一層発展をとげ、その結果、1995年以降のワールドカップでは5大会中4大会を南半球勢が優勝している。その中でも特にニュージーランド (以下ではNZと称する) は、2011年と2015年にワールドカップで優勝しているのに加え、2012年から南半球4ヶ国で開催されているザ・ラグビーチャンピオンシップでは、6大会で5回優勝しており、そのうち4回は全勝している。NZは世界ランキングでも2011年から現在まで1位を維持しており、まさに世界のラグビーの最高峰であると言える。しかし、そのNZが、上述したような現在のブレイクダウンの状況の中で、トップレベルにある他国のチームと比べて、防御プレーにどのような特徴があるのかは明らかにされていない。

そこで本研究は、世界トップレベルでのラグビーにおけるブレイクダウンの防御プレーを明らかにすること、また世界トップを維持しているNZのブレイクダウンの防御プレーの特徴を明らかにすることを目的とする。また、コーチング現場へ有用な示唆を与えることをも目的とした。

2. 方法

2.1 標本

2016年と2017年のザ・ラグビーチャンピオンシップの中から、NZ、オーストラリア（以下ではAUSと称する）、南アフリカ（以下ではSAと称する）の3ヶ国同士が対戦したそれぞれ6試合、計12試合を標本とした。また、この3ヶ国は、世界ランキングで常に上位を占めるチームであり、世界トップレベルの試合の標本として妥当であると考えた。表1に標本として使用した試合の詳細を示す。

2.2 記述的ゲームパフォーマンス分析

2.2.1 基本的方法

分析は、標本の試合について、ゲーム分析ソフトのゲームレイカー（Sports tec 製、1997）を使って行った。分析材料とした映像は、テレビ放映された試合映像を録画したものである。分析はラグビーのプレー及び指導経験があり、ラグビーの科学研究に従事している筆者1名が行った。

2.2.2 分析対象

本研究ではラックだけでなく、以下でブレイクダウンを定義し、分析対象とした。ブレイクダウンを「ボールキャリアがタックルを受けて、地面に倒れ、ラックが形成され、ボールアウトするまで」とし、ラックを「ボールキャリアが地面に倒れてから、ラックが形成され、ボールアウトするまで」とした。競技規則では、「ラックは、各チームから少なくとも1名ずつのプレーヤーが接触しており、立ったままの状態、地上にあるボールに被さっていることで形成される」（Word Rugby, 2018, p70）と定義されている。しかし、本研究でこのようにブレイクダウンとラックを定義した理由は、ボールキャリアが地面に倒れる前のタックル成立直前に、タックラーやサポートプレーヤー間で激しい攻防が起きているため、ボールキャリアが倒れた後ではなくタックルを発生させた場面から防御プレーヤーの行動を明らかにしたいと考えたからである。そこで本研究では、攻撃側がボールを継続したブレイクダウンにおける防御側のプレーの特性を明らかにするため、ボールキャリアがタックルを受けて、地面に倒れ、ラックが

表1 標本とした試合の詳細

番号	日付	大会		対戦カード			スコア		
1	2016/8/20	The Rugby Championship	Round1	NZ	v	AUS	42	v	8
2	2016/8/27	The Rugby Championship	Round2	NZ	v	AUS	29	v	9
3	2016/9/10	The Rugby Championship	Round3	AUS	v	SA	23	v	17
4	2016/9/17	The Rugby Championship	Round4	NZ	v	SA	41	v	13
5	2016/10/2	The Rugby Championship	Round5	SA	v	AUS	18	v	10
6	2016/10/9	The Rugby Championship	Round6	NZ	v	SA	57	v	15
7	2017/8/19	The Rugby Championship	Round1	NZ	v	AUS	54	v	34
8	2017/8/26	The Rugby Championship	Round2	NZ	v	AUS	35	v	29
9	2017/9/9	The Rugby Championship	Round3	AUS	v	SA	23	v	23
10	2017/9/16	The Rugby Championship	Round4	NZ	v	SA	57	v	0
11	2017/10/1	The Rugby Championship	Round5	SA	v	AUS	27	v	27
12	2017/10/8	The Rugby Championship	Round6	NZ	v	SA	25	v	24

注: ニュージーランドをNZ,オーストラリアをAUS,南アフリカをSAと称する。

形成され、ボールがラックから攻撃側に出るまでのプレーが成立したブレイクダウン場面を分析対象とした。また、ブレイクダウンでボールを防御側が奪った場合や、ラック形成前にボールが転がった場合は、分析対象としなかった。また、ブレイクダウンにはモールというプレーも含まれるが、本研究ではモールを分析対象としなかった。「モールはボールキャリアと各チームから少なくとも1名ずつのプレーヤーが互いにバインドし、立ったままの状態になることで成立する。」(Word Rugby, 2018, p72)と定義されており、ラックとは様相が違うこと、近年のラグビーゲームではラインアウトなどの限られた状況での発生に、モールが限られるために分析対象には加えなかった。

2.2.3 分析項目

①ブレイクダウン参加人数

ブレイクダウンに関わった防御側プレーヤーを全てカウントした。そして、それをタックラーとアライビングプレーヤーに分類した。タックラーとはボールキャリアにタックルしたプレーヤーで、アライビングプレーヤーはボールキャリアが倒れてからブレイクダウンに参加したプレーヤーである。タックラーは、ボールキャリアを倒すか、倒したことに影響を与えた場合にカウントをした。つまり、タックル後、ボールキャリアがバランスを崩すことなく、タックラーを振りほどいて走った場合は、タックラーとしてカウントしなかった。

②ボールアウトラック参加人数

ボールがラックから出た(以下ではボールアウトと称する)時点でラックに残っているプレーヤーを「ボールアウトラック」参加プレーヤーとしてカウントした。残っている状態は、倒れているか、相手に掴まれているか、相手に体を密着させている場合を参加プレーヤーとした。

③ボールアウト時間

本研究ではボールキャリアの上半身が地面に

着いてから、スクラムハーフ役のプレーヤーがボールを持ち上げるまでの時間をボールアウト時間として計測し、2.5秒未満と2.5秒以上で分類した。これは2014年の世界トップレベルのゲームで、2秒以内のラックが35%程度あり、3秒のラックが31%と、約65%ラックが集中している(Shimasaki et al, 2017)ことや、国内トップチームで倒れてから2秒で起き上がることをトレーニングしているという報告がある(奥山, 2018)ことから、世界トップレベルでの速さの差を検証するために2.5秒未満と2.5秒以上の基準での分類にした。2秒ではなく2.5秒未満までを対象としたのは、コーチング現場においてラックから2秒のボールアウトを意識する場合、厳密な2秒よりも誤差を考慮した方が現場でのコーチングの感覚と一致すると考えたため、本研究では2.5秒未満と2.5秒以上という分類した。計測は少数第一位までを行い、2.4秒以内のデータを2.5秒未満、2.5秒以上のデータを2.5秒以上と2つに分類した。

④タックラーのコンテスト

タックラーのタックル発生後のコンテストの有無をカウントした。攻撃側のサポーターと防御側のプレーヤーがボール争奪のためにコンタクトしたか否かを記録した。この際、防御側のプレーヤーが攻撃側のサポーターと体を接触している場合や、1秒以上掴まれている場合は、「コンテスト」成立とした。「コンテスト」が成立したものを「コンテスト」、成立していないものを「ノンコンテスト」とした。

⑤タックラーのアクション

タックラーのタックル発生後のアクションをカウントした。ボールアウト時に、ラックから「リロード」したか、あるいは「ステイ」したかを記録した。本研究では、ブレイクダウンに関わったプレーヤーがボールアウトまでに起き上がっている状態を「リロード」とした。つまり、タックル後に倒れてから起き上がった場合も、倒れずにタックルし、そのブレイクダウンから離脱した場合も、どちらも「リロード」と

してカウントした。一方、ラックで倒れている場合と、ラックで掴まれている状態は「ステイ」とした。

⑥アライビングプレーヤーのアクション

アライビングプレーヤーのラックへの参加後のアクションをカウントした。内容としては、ボールアウト後にラックから「リロード」したか、あるいは「ステイ」したかを記録した。

2.2.4 結果の処理方法

分析結果はチームごとに集計し、結果の処理を行った。チーム別に比率の差について、Fisherの正確確率法により有意差検定を行い、群間で有意差が認められた場合には、Ryanの法により多重比較を行った。有意水準はいずれも5%とした。

2.2.5 信頼性の検討

本研究の分析記録の信頼性を分析者間信頼性の見地から確認するために (James et al, 2007), ラグビーのプレー及び指導経験がありラグビーの科学研究に従事している別の者と筆者が、標本の1試合 (103ブレイクダウン) について同じ分析を行い、2人の分析結果をもとにHughes et al. (2002) による誤差率を求めた。

3. 結果

3.1 分析結果の信頼性

それぞれの分析項目の分析結果について、筆

者と分析者2名との誤差率を求めた。その結果、いずれも5%未満の値が得られた。したがって分析記録は十分に許容できる水準の信頼性があると考えられる (Hughes et al, 2002)。

3.2 ブレイクダウン参加人数とボールアウトラック参加人数

表2にブレイクダウン参加人数と「ボールアウトラック」参加人数のそれぞれの結果を示した。表2が示すように、3カ国間でブレイクダウン参加人数については有意な差は認められなかった。「ボールアウトラック」参加人数の比率では0人と2人で有意な差が認められ、0人はNZがAUS及びSAと比べて有意に高く、2人ではNZはAUS及びSAと比べて有意に低い値が示された。

3.3 タックラーとアライビングプレーヤー

表3ではブレイクダウンに関わったタックラーとアライビングプレーヤーのそれぞれの結果を示した。表3が示すように、タックラーでは1人と2人で有意な差が認められ、1人ではNZ及びAUSがSAと比べて有意に高く、2人ではSAがAUSと比べて有意に高い値を示した。アライビングプレーヤーでは2人で有意な差が認められ、NZがAUSよりも有意に低い値を示された。

表2 ブレイクダウン参加人数とボールアウトラック参加人数に関する分析結果

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	総数
3カ国		19%	61%	18%	2%	0%	1772
ブレイクダウン 参加人数	NZ	20%	64%	15%	1%	0%	633
	AUS	21%	59%	18%	2%	0%	563
	SA	16%	60%	20%	3%	0%	576
	3カ国間での有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	
3カ国	15%	53%	30%	2%	0%	1772	
ボールアウト ラック参加人数	NZ	19%	56%	24%	2%	0%	633
	AUS	13%	52%	32%	3%	0%	563
	SA	12%	51%	34%	3%	0%	576
	3カ国間での有意差 *NZ>AUS,SA	n.s.	*AUS,SA>NZ	n.s.	n.s.		

*:p<0.05

n.s.:non significant

表3 タックラーとアライビングプレーヤーに関する分析結果

		0人	1人	2人	3人	4人	5人	総数
タックラー	3カ国	3%	38%	55%	4%			1772
	NZ	3%	39%	56%	3%			633
	AUS	3%	43%	50%	4%			563
	SA	3%	32%	61%	4%			576
	3カ国間での有意差	n.s.	*NZ,AUS>SA	*SA>AUS	n.s.			
アライビングプレーヤー	3カ国	63%	31%	5%	1%	0%	0%	1772
	NZ	65%	32%	3%	1%	0%	0%	633
	AUS	63%	30%	6%	1%	0%	0%	563
	SA	64%	30%	5%	1%	0%	0%	576
	3カ国間での有意差	n.s.	n.s.	*AUS>NZ	n.s.	n.s.	n.s.	

*: p<0.05

n.s.: non significant

表4 タックラーとアライビングプレーヤーのアクションに関する分析結果

		リロード	ステイ	総数
タックラー	3カ国	40%	60%	2824
	NZ	47%	53%	1002
	AUS	38%	62%	872
	SA	36%	64%	950
	3カ国間での有意差	*NZ>AUS,SA	*AUS,SA>NZ	
アライビングプレーヤー	3カ国	42%	58%	773
	NZ	40%	60%	250
	AUS	35%	65%	261
	SA	49%	51%	262
	3カ国間での有意差	*SA>AUS	*AUS>SA	

*: p<0.05

n.s.: non significant

3.4 タックラーとアライビングプレーヤーのアクション

表4ではタックラー数とアライビングプレーヤーに数に対する「リロード」と「ステイ」の比率を示した。タックラー数に対する「リロード」と「ステイ」の比率では、「リロード」の比率でNZがAUS及びSAより有意に高い値を示し、「ステイ」の比率ではNZがAUS及びSAより有意に低い値を示した。またアライビングプレーヤー数に対する「リロード」と「ステイ」の比率ではSAが「リロード」においては最も高い値を、「ステイ」においてはSAが最も低い値を示し、いずれもSAとAUSの間に有意な差が認められた。

3.5 タックラーのアクションとコンテスト

表5ではタックラーが「リロード」と「ステ

イ」のアクションを取ったときの「コンテスト」の有無を比率で示した。「リロード」して「ノンコンテスト」だった場合が、NZがAUS及びSAに比べ有意に高かった。また「ステイ」して、「ノンコンテスト」だった場合は、NZがAUS及びSAに比べ有意に低かった。さらに、「ステイ」して「コンテスト」した値は、NZが最も比率が低く、SAとの間では有意な差が認められた。

3.6 ボールアウト時間で区別したタックラーとアライビングプレーヤーのアクション

表6ではタックラーとアライビングプレーヤーを、ボールアウト時間の2.5秒未満と2.5秒以上に分けて比較した。そこからタックラーとアライビングプレーヤーが「リロード」したか、「ステイ」したかの比率も示した。タック

表5 タックラーのアクションとコンテストに関する分析結果

	リロード		ステイ		総数
	ノンコンテスト	コンテスト	ノンコンテスト	コンテスト	
3カ国	33%	7%	23%	37%	2824
NZ	38%	8%	19%	35%	1002
AUS	32%	6%	25%	37%	872
SA	28%	8%	24%	40%	950
3カ国間での有意差	*NZ>AUS,SA	n.s.	*AUS,SA>NZ	*SA>NZ	

*: p<0.05
n.s.: non significant

表6 ボールアウト時間で区別したタックラーとアライビングプレーヤーのアクションに関する分析結果

	2.5秒未満				総数
	リロード		ステイ		
	リロード	ステイ	リロード	ステイ	
3カ国	14%	26%	26%	33%	2824
NZ	19%	25%	28%	28%	1002
AUS	13%	24%	25%	38%	872
SA	11%	30%	25%	34%	950
3カ国間での有意差	*NZ>AUS,SA	*SA>NZ,AUS	n.s.	*AUS,SA>NZ	
3カ国	9%	13%	32%	46%	773
NZ	8%	15%	32%	44%	250
AUS	7%	12%	28%	53%	261
SA	13%	11%	37%	39%	262
3カ国間での有意差	n.s.	n.s.	n.s.	*AUS>SA	

*: p<0.05
n.s.: non significant

ラーに関しては、2.5秒未満の「リロード」でNZがAUS及びSAよりも有意に高く、「ステイ」ではSAがNZ及びAUSよりも有意に高い値を示した。また、2.5秒以上では「ステイ」でNZがAUS及びSAよりも有意に低かった。アライビングプレーヤーに関しては、2.5秒以上のラックで「ステイ」していた値はSAがAUSに比べ有意に低い値が示された。

4. 考察

4.1 世界トップレベルのブレイクダウンの防御プレー

世界トップレベルのブレイクダウン参加人数において、1人が19%、2人が61%と3人未満で80%を占め、「ボールアウトラック」参加人数では0人が15%、1人が53%と2人未満で68%を占めた(表2)。2014年の世界トップ

レベルにおけるラックの防御側参加人数においても、0人は10%、1人は47%との報告がされており(Shimasaki et al,2017)、ボールアウト時のラックにおける防御側の少人数化が進んでいる。タックラーとアライビングプレーヤーにおいても、55%が2人でタックルしており、1人のタックラーである単独タックルが38%であった(表3)。それに対し、2006年の国内試合で6割が単独タックル(古川ら,2006)、2014年の世界のトップレベルで42.7%が単独のタックルであることが報告されている(木内ら,2015)。先行研究と対象試合に違いはあるが、タックル様相において単独タックル比率の減少傾向が示された。アライビングプレーヤーに関しては、63%のラックではアライビングプレーヤーが参加していないことが明らかになった(表3)。タックラーとアライビン

グプレイヤーのアクションに関して、「リロード」の比率が40%と42%、「ステイ」の比率が60%と58%と、タックラーとアライビングプレイヤーの間で大きな差はない(表4)。アライビングプレイヤーはボールを奪取できると判断して参加していると考え、「ステイ」率が高いと予想したが、そのような傾向はなく、タックラーもアライビングプレイヤーも同じ比率であった。タックラーは37%が「コンテスト」して「ステイ」し、33%が「ノンコンテスト」して「リロード」している(表5)。そして23%が「ノンコンテスト」でラックに「ステイ」していることが明らかとなった。「ノンコンテスト」で「ステイ」するというのは、防御としてのアクションとしてプラスな面は少ない。世界トップレベルでも、23%のタックラーがこのようなアクションをしていることが明らかになった。

ボールアウト時間で区別したタックラーのアクションからは、リロード率が2.5秒未満と2.5秒以上でそれぞれ、14%と26%と差があった(表6)。2.5秒未満の速さでも14%はリロードするという世界のトップレベルの基準が示された。アライビングのボールアウト時間で区別したアクションでは、2.5秒以上で「リロード」と「ステイ」の合計で78%を占めた(表6)。これはアライビングプレイヤーが参加したことで2.5秒以上になっているとも考えられる。

4.2 NZとSAのブレイクダウンでの防御プレーの特徴

NZの「ボールアウトラック」参加人数は、他の2カ国に比べ0人で有意に高く、2人で有意に少ない(表2)。タックラーは1人である単独タックルで有意にSAよりも高く、アライビングプレイヤーでは2人でAUSよりも有意に低かった(表3)。これは、NZがボールアウトした防御時に、他の2カ国よりも防御ラインに多い人数を揃えて防御していることを意味する。今回標本とした2016年と2017年のザ・ラ

グビーチャンピオンシップにおいて、SANZAR(2018a; 2018b)の報告によると、NZは他の2カ国よりもタックル成功率が高いことが報告されている(2017年ではNZ, AUS, SAの順に、87.0%, 81.8%, 83.3%, 2016年には90.0%, 82.6%, 83.0%)。タックル成功率を高める防御戦術の要素としては、防御ラインに多くの人数を揃えることで個々の防御プレイヤーの守るべき幅を狭めること、もしくはボールアウト時間を遅らせ、組織を整える時間を得ること、または前に出て相手の勢いに乗るスピードを奪うこと、などが考えられる。そのうちNZの場合は、防御ラインで多くの人数を揃えることで、防御の優位性を作り出し、タックルの成功につなげているのではないかと考えられる。タックル技術の高さが起因して、タックルの成功を助長し、早い「リロード」を可能とし、多い人数が揃えられるという循環になっているとも考えられる。また、最初から相手を止めるために、投じる防御の人数を少なくしているかというところではなく、ブレイクダウン参加人数では他国と差がないが(表2)、「ボールアウトラック」参加人数が少ないことから、ブレイクダウンが発生後からボールアウトまでの「リロード」に差が見られることがわかる。

次に、NZのタックラーとアライビングプレイヤーのアクションについて考察すると、NZは他の2カ国と比べて、タックラーの「リロード」率が高く、「ステイ」率が低い(表4)。またタックラーのアクションと「コンテスト」に関しては、他の2カ国と比べ、「リロード」での「ノンコンテスト」率が高く、それに加えて「ステイ」で「ノンコンテスト」しているプレイヤーが少ない(表5)。そしてボールアウト時間で区別したタックラーのアクションにおいては、NZはボールアウトが2.5秒未満の場合に「リロード」している比率と、2.5秒以上の場合に「ステイ」の比率で、他の2カ国と有意な差がある(表6)。アライビングプレイヤーに関しては、NZと他の2カ国とでは顕著な違いは

みられなかった。

ブレイクダウンの防御プレーにおいて、他の2カ国に比べたNZの特徴は、タックラーのアクションの違いである。NZは他の2カ国よりもタックラーが「コンテスト」せずに「リロード」することを優先したアクションを取っていることがわかる。また、ボールアウトが2.5秒未満の場合に「リロード」している比率で他の2カ国と違いが見られ、2.5秒以上で「ステイ」している比率もAUSに比べると10%も低い。これは、NZのタックラーが「コンテスト」を優先せずに、如何にタックル後に速く「リロード」しているかを示している。「リロード」するのは防御の人数を揃えるため、「コンテスト」するのはボールアウト時間を遅らせて防御の時間を得るためか、ボールを奪うためであると考えられる。前述したように「ノンコンテスト」で「ステイ」するというのは、防御としてのアクションとして、プラスな面は少ないが、NZ以外の2カ国は「コンテスト」せず、「ステイ」しているプレーヤーがNZより多いことが明らかになった。この原因は、防御プレーヤーがタックル時にボールキャリアの下敷きになり動けないか、単純な動作の遅さではないかと推察される。このようなことから、他の2カ国とNZの防御プレーの違いは、速い「リロード」や「ノンコンテスト」の「リロード」が多く、ボールアウト時に「コンテスト」せずに残るタックラーの少なさが特徴である。そして、「ノンコンテスト」で速く「リロード」し、防御ラインに多くの人数を揃えることで、個々の防御プレーヤーの守るべき幅を狭めて、タックルの成功率を上げ、タックルが成功することで速い「リロード」を維持するという循環が起きていることが推察できる。

NZの防御プレー以外で特徴的だったことは、1つはSAのタックラーが1人である単独タックルで有意に他の2カ国より少なく、2人でのタックルでAUSよりも有意に高いことである(表3)。2つ目は、SAのアライビングプレーヤー

の「リロード」の比率がAUSに比べて高く、「ステイ」の比率がAUSの65%に比べて51%と、14%も低いことである(表4)。これと関連する報告として、2016年のザ・ラグビーチャンピオンシップでのブレイクダウンの反則に関して、タックラーとアライビングプレーヤーの数が示されている。そこでは、NZがタックラー8、アライビングプレーヤー12、AUSがタックラー6、アライビングプレーヤー15であるのに対して、SAはタックラー10、アライビングプレーヤー9個とアライビングプレーヤーの反則が他の2カ国と比べて少ない(World Rugby, 2016, p30)。このことから、アライビングプレーヤーがボール争奪場面に絡んできていないとも推察できる。したがって、SAはブレイクダウンで他の2カ国と比較し、アライビングプレーヤーを積極的にブレイクダウンに投入させない防御プレーを意図していると考えられる。

4.3 コーチング現場への示唆

本研究では、ブレイクダウンの防御プレーに関するNZとSAの特徴がいくつか明らかになった。それらの特徴といくつかの文献をもとに、NZとSAの防御プレーを推察することで、コーチングの現場への示唆としたい。

NZは、崩れない防御に基づいたカウンター攻撃を武器としていること推察できる。本研究で防御したブレイクダウンの数はNZが633回と他の2カ国に比べて多く、タックル回数も1002回と他国に比べて多い。つまり、NZは相手よりも防御をしている回数が多い。そして、WORLD RUGBY (2016, p13)の報告によれば、2016年のザ・ラグビーチャンピオンシップでは、NZのトライの起点となったプレーは、ターンオーバーが8でカウンターが10となり、それは全体のTRYの47%を示し、AUSはターンオーバー4、カウンター3、SAはターンオーバー2、カウンター1、となっている。これはNZが相手のキックやターンオーバーを得点につなげていることを示している。つまり、NZ

は防御の機会が多くなっても、ボールの奪取を焦らずに速い「リロード」を繰り返し、常に防御ラインに人数を揃えることで、相手がボールを失うかキックするまで待てる防御を構築しており、そこからの攻撃を得点源にしていることが推察できる。これは、「リロード」の速さ、高いタックル成功率に裏付けされた防御力が大きく影響している。

また、SAは強いフィジカルに基づいたタックルでボール奪取を狙うチームであることが推察できる。SAはフィジカルなプレーを得意としており（生島，2015）、単独タックルが少なく、2人でタックルし、アライビングプレーヤーの「リロード」率の高さと反則の少ない傾向がある。それらのことから、チョークタックルでボールを奪うことを意図しているのではないかと推察した。チョークタックルとはフィジカルの強いチームに有効であるとされており、「相手の動きを封じてモールアンプレアブルを狙ってボールを奪い返すことに主眼を置いたタックルである。」（斎藤，2018）とされ、アライビングプレーヤーを要しないボール奪取方法である。実際にはチョークタックルを本研究では分析してないので詳細は明らかにできないが、単独タックルとアライビングプレーヤーの積極的な参加が少ないSAがそのような防御プレーを狙っていることが推察でき、NZとは違った防御プレーを意図している可能性が示唆された。

5. 結論

本研究は、世界トップレベルでのラグビーにおけるブレイクダウンの防御プレーを明らかにすること、また世界トップを維持しているNZのブレイクダウンの防御プレーの特徴を明らかにすることを目的とする。また、コーチング現場へ有用な示唆を与えることを目的とした。そのために2016年と2017年のザ・ラグビーチャンピオンシップの、NZ、AUS、SAが対戦した12試合を標本とし、防御側のブレイクダウンの詳細な分析を行った。世界トップレベルでは

以下のような傾向がみられた。

- 1) 防御側のラックへの参加人数は減少傾向にあり、ブレイクダウン参加人数は1人が19%、2人が61%、「ボールアウトラック」参加人数は0人が15%、1人が53%占めた。
- 2) 複数がタックルする傾向が進んでおり、タックラーは1人である単独タックルが38%、2人でのタックルが53%を占めた。また、アライビングプレーヤーは0人が63%、1人が31%であった。
- 3) タックラーの37%が「コンテスト」して「ステイ」しており、33%が「ノンコンテスト」で「リロード」し、23%は「ノンコンテスト」で「ステイ」している。

NZの防御プレーはAUS及びSAと比べ、以下のような特徴がみられた。

- 1) 「ボールアウトラック」参加人数が少なく、防御ラインに多くの人数を残している。
- 2) タックラーの「リロード」率が高く、「ステイ」率が低い。特に「ノンコンテスト」での「リロード」比率が高く、「ノンコンテスト」での「ステイ」比率は低い。
- 4) タックラーが2.5秒未満のボールアウト時間での「リロード」比率が高く、2.5秒以上の「ステイ」比率は低い。

このことは、ブレイクダウンにおいてNZが「ノンコンテスト」で速い「リロード」を行い、防御ラインに人数を揃えている防御プレーを行っていることが推察された。

本研究では、防御側がブレイクダウンでボールを奪った場合を分析していない。実際に世界のトップレベルの試合では、150回以上起こるラックの95%は攻撃側が継続したラックであるため、本研究ではこの95%の部分について分析を行なった。しかし、ラグビーではボールの争奪と継続が重要な原則であるため、このボールを奪う5%の部分明らかにすることは今後の重要な課題と言える。

注

- 1) IRB がこれまでのアマチュア規定を撤廃し、ラグビーにおける商業化及びプロ化を受け入れたことを、「オープン化」の宣言と言われる。

参考文献

- 古川拓生・竹村雅裕・中川 昭：ラグビー競技におけるタックルプレーの様相について．筑波大学体育科学系紀要，29：71-75. 2006.
- 林 雅人：連続写真で見るラグビーの戦術 1. p.140. ベースボールマガジン社. 東京. 2015.
- Hughes, M., Cooper, S-M., & Nevill, A.: Analysis procedures for non-parametric data from performance analysis. *International Journal of Performance Analysis in Sport*. 2: 6-20. 2002.
- 生島 淳：コーチングとは「信じること」. p.170. 文藝春秋. 東京. 2015.
- 伊藤鐘史：日本代表のブレイクダウン. *ラグビークリニック*，27：8. 2013.
- James, N., Taylor, J., & Stanley, S.: Reliability procedures for categorical data in performance analysis. *International Journal of Performance Analysis in Sport*, 7: 1-11. 2007.
- 木内 誠・鷺谷浩輔・早坂一成：世界トップレベルの7人制ラグビーと15人制ラグビーにおけるタックルの比較. *スポーツパフォーマンス研究*，7：334-345. 2015.
- Lee, S.：ラグビーをひもとく. pp.177-188. 集英社. 東京. 2016.

- 松村 径：ラグビーにおける防御形態に関するゲーム分析研究－世界トップレベルと日本のトップレベルの比較を中心に－. *筑波大学運動学研究*，17：29-35. 2001.
- 中川 昭：ラグビーにおける記述的ゲームパフォーマンス分析を用いた研究. *筑波大学体育科学系紀要*，34：1-16. 2011.
- 奥山 将志：<https://www.nikkansports.com/sports/news/201801140000140.html> (2018/9/1 アクセス).
- 斎藤健仁：日本ラグビーの戦術・システムを教えましょう. p.194. 東邦出版. 東京. 2018.
- SANZAR: <https://sanzarrugby.com/therugbychampionship/fixtures/archives/2016-trc/> (2018/9/1 アクセス). 2018a.
- SANZAR: <https://sanzarrugby.com/therugbychampionship/fixtures/archives/2017-trc/> (2018/9/1 アクセス). 2018b.
- Shimasaki, T., Chiba, G., Furukawa, T., Nakagawa, A.: Change in ball continuity situations in breakdown in world-class rugby -focusing on the number of players involved and time required to get the ball out-. *Football Science*, 14: 24-33. 2017.
- World Rugby: Rugby World Cup 2015 Statistical Review and Match Analysis. *World Rugby Game Analysis*, p.13, 18. 2015.
- World Rugby: The Rugby Championship 2016 Statistical Report. *World Rugby Game Analysis*, p.13, 30. 2016.
- World Rugby: 競技規則 Rugby Union 2018. pp.7-11, 70, 72. 2018.